

【国語科】教科提案

初発を大切にし、総合的に読む力を育む
～関連して伝え合うことによる自己変革を意識させながら～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 目指す子どもの姿

①初発でのつかみを大切にし、文章全体を総合的に読む力をもつ子に

国語科の目標は、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」と小学校学習指導要領解説国語編の総説第1章第4節に示されている。中でも「伝え合う力」は互いの立場や考えを尊重しながら自分の言葉で伝え合う能力の育成を重視して新たに設けられたものである。私たちも、生きて働く言葉の力を身に付けることが、今の時代に欠かすことができないと考え、一昨年、昨年と「読むこと」を通して、「伝え合う力」を高めることに主眼を置いて研究を進めてきた。「読むこと」を通してとしたのは、「読むこと」を通して「伝え合う力」を高めようとするときには、おのずと「話すこと・聞くこと」、「書くこと」も大切にするということになると考えたからだ。

一昨年、昨年と「伝え合う力」の育成に主眼をおいて研究を進める中で、伝え合いの質を高めるためには、文章読解時における言語認識力を高めることが不可欠であるという考えに至った。そこで、この認識力を高めるため、子どもたちに「比較」を意識させることにした。(※研究実践の詳細は、昨年度研究紀要に掲載)それによって、子どもたちの発言は、文章中の言語表現に対して「ふつうだったら～だけれど、・・・」や「自分だったら～したと思うけど、～は、・・・」というような自分の生活経験と照らし合わせた発言が多く見られるようになった。また、学習を進める中で、多読したシリーズ作品に見られる同様の展開部分の言語表現を取り上げて発言するなど、自ら新たな比較の観点を見つけて発言する場面も見られるようになった。これらの姿は、物事を比べて見ようとするのが習慣化しつつある姿であり、子どもたちの言語認識力の高まりという点で一定の研究成果が得られたのではないかと私たちは判断した。

しかし、私たちにはひとつの反省点があった。それは、比較を意識した学習展開をするなかで、部分的な分析読みばかりに力を入れるようになっていたことである。もちろん、国語科において、大切な言葉については本文へ立ち返り、意味を押さえながら読むことは必要不可欠なことである。ただ、その部分読みが文章全体を意識したものでなければ、本当の文章理解にはつながりにくい。よって、「比較」を意識することによって高まりつつある子どもたちの言語認識力を文章読解力に結びつけていくためには、初めから文章全体を意識して読み、文章の全体像をつかんだ上で部分部分を読み深めていくような学習が必要ではないかという考えに至った。

本年度は、初めて出会った文章の全体を読み通し、意味内容のあらましをつかんだ上で筆者が伝えようとしていることや作品が持つ素晴らしさを自分なりにつかんだり味わったりする力（私たちはそれを「初読力」と呼ぶことにする。）を意識した学習を展開していく。「初発によるつかみ」を子どもたちに意識させ、それを持った上で互いの考えを伝え合い、自己の初発への振り返りを通して、文章全体を総合的に読む力を育てていくことにした。

②各学年における「初読力」

子どもたち一人ひとりの読解力には当然差異があるが、初発によって文章のあらましをつかみ、作品のもつ素晴らしさを感じる「初読力」を育成していくにあたり、次のような学年到達目標を持って指導にあたってきた。

- ア低学年では・・・初めの通読時に文章全体を見通して文章の流れやあらましをつかみ、先生の指示を参考にしながら具体的な感想を持ち、表現することができる。
初めの通読時に作品のおもしろさや楽しさ、不思議さに気づく。

イ 中学年では・・・初めの通読時に文章全体を見通して段落相互の関係や文章のあらましをつかみ、筆者が伝えようとしていることについて自分なりの考えを持ち、表現することができる。
初めの通読時に作品のおもしろさや楽しさ、不思議さに気づき、文章全体における意味を考える。

ウ 高学年では・・・初めの通読時に文章全体を見通して段落構成や文章のあらましをとらえ、筆者が伝えようとしている要旨や主題について自分なりの解釈を持ち、表現することができる。
初めの通読時に作品のおもしろさや楽しさ、不思議さを見つけ、これまでの学習経験をもとに文章全体における意味を考える。

上記到達目標を目安とし、学年発達段階を考慮した上で、適切な学習教材を選択した。単元を通して学習前と学習後の自己の読みを比較し、自己の高まりを感じるとともに、そこで培った文章読解力を新たな初読力として次単元の学習や読書時に活かしていけるように考えた。

(2)「意味と内容」がひろがる国語科の学び

①国語科における「意味」とそのひろがり

国語科は、言語を媒介にして思考力や想像力、言語感覚を養う側面がある。一つひとつの文字が合わさって言葉としての意味を持ち、それが集まって文としての意味を持つ。国語科においては、表現された文章に、筆者が込めた思いや伝えようとしていることが「意味」となる。よって、物語における主題や説明文における要旨、詩や短歌に込められた願いやテーマが「意味」になるであろうし、また、文章に内在する言葉のリズムやおもしろさや不思議さなどもまた「意味」とも言える。子どもたちが、文章に初めて接し、自己の解釈を持ったとき、初めてその子なりの「意味」を獲得する。そして、互いの考えを伝え合い、響き合わせる中で、自己の解釈について自信を深めたり、付け加えたり、変更したりする。そのときに、子どもたちは「意味」をひろげている。

②国語科における「内容」とそのひろがり

国語科における「内容」とは、上記①に示した「意味」を獲得し、ひろげていく学習活動・学習方法ととらえている。私たちは、子どもたちが、具体的な学習活動・学習方法（音読、多読、劇化、心情読み、調べ読み、比べ読み、読書等）によってより深い読みを実現していけるようにと考える。もちろん、それらの学習活動に「話すこと・聞くこと」、「書くこと」が付随することは言うまでもない。私たちは、子どもたちの実態や初発の感想などをもとに、どんな学習を選択し、展開していくかを考えていく。例えば、音読や劇化を取り入れたとき、子どもたちは、「もっとこうしたい。」「この場面はここまでしないといけなない。」「ここはどう表現したらいいのだろう。」「いや、こうする方がいい。」「と必要に迫られて考え、話し合い、学習を発展させていく。また、関連作品の多読をしたり、参考文献を読むことによって教材文を再読したりするとき、「あれにはこう書いてあったからこうかもしれない。」「あれはこうだったけど、これではこうなっている。」「他のものはどうだろう。」「もっとあるかもしれない。」「こんなことも調べてみたい。」「と学習を発展させていく。そんな学習展開によって「内容」はひろがり、そのひろがり、学習後により深い「意味」となって子どもたちにかえってくることになる。

2. 国語科学習でのまなざしの共鳴

①関連して伝え合うことによる自己変革

昨年度は、学校提案のキーワードであった「まなざしの共有」に基づき、教師が児童のまなざしを共有するいわゆる「みとり」に重きを置いてきた。教師が個々の子どもたちのまなざしを共有することで、本質にせまる比較の観点を設定することが可能であったことを顧みれば、それは効果的であったといえる。しかし、私たちは、個々のまなざしのみとりを大事にしながら、常に子どもたち同士のまなざしの共有にも着目してきた。それは、私たちが、伝え合う力を高めることに主眼を置いていたことから明らかである。今年度は、「まなざしの共鳴」を本校の研究におけるキーワード

にしてきた。それは私たちが昨年度も目指してきた、「子どもたちがより深く物事を認識し、質の高い伝え合いをすること」を目指すことに他ならない。子どもたちの中には、高い認識力を自分の読みに活かしたり、お互いの読みについて伝え合い、響き合ったりすることのできる子がいる。ただ、学級全体として見たときには、それはまだまだ不十分であると言わざるを得なかった。また、認識力を高めるための比較の観点が教師主導の設定になり、分析的に読むことに力を注いでしまう結果になったことは前述の通りであった。そこで、本年度は、「関連して伝え合うことによる自己変革」を国語部のキーワードとし、子どもたち一人ひとりが常に「自分の考え」をもって学習に参加し、「友達の発言に関して自分はどうか考えるのか。」「今の発言に関連する部分はどこなのか。」「関連して考えられることはないのか。」など、相手の発言との関連を考えながら、聞いたり、書いたり、発言したりして、互いの考えを響き合わせながら学習を進められるようにし、それを経て、学習前の自分の読みと学習後の自分の読みがどう変わったのか、自己の変革を意識させながら読みを深めていけるようにしていきたいと考えた。

②まなざしの共鳴を生むであろう子どもたちの姿

子どもたちがどんな状態であれば学習の中にまなざしの共鳴を生むことができるのであろうか。私たちは①で述べたように、子どもたちが、関連して伝え合うことを意識しながら学習を進め、次のような姿がみとれる時、共鳴が生まれる可能性を秘めていると捉えていた。

- ・ 友達の発言に対し、目を輝かせながらうなずいて聞いている。
- ・ 友達の発言を受け、それにつなげて自分の意見を出している。
- ・ 友達の発言を受け、自分の書いた考えに、新たに書き足している。
- ・ 友達の発言を受け、自分の書いた考えに、修正を加えている。
- ・ 友達の発言を受け、自分の書いた考えに、自信を深めている。
- ・ 友達の発言を受け、明らかな根拠を持って反対意見を出している。

また、上記のような子どもたちの姿を生む条件として、

- ・ しっかり聞き合える集団であること。
- ・ 友達の意見を尊重できる集団であること。
- ・ どんな思いでも表現できる集団であること。
- ・ 失敗や間違いを恐れず、自分の思うことを話せる雰囲気をもった集団であること。

を挙げ、このような学習文化の構築に学年当初から取り組んできた。

3. 研究の展望

①「初発によるつかみ」を大切にして総合的に読む力を高める

私たちは、これまでおこなってきた部分的な分析読みだけを重視する学習ではなく、初発における全体読みを意識させた学習（全体像をつかませた上で読み深め、折に触れて自己の初発へ立ち返らせる学習）をしていくことで、文章全体を総合的に読む力を高めると仮定した。

これまでの学習では、初発の感想は書かせるものの、それは子どもたちが読み深めていくための課題設定の参考にするためのものであることが多かった。一方、私たちが提案する「初発によるつかみ」を大切にする指導では、教材文との出会い時からより文章全体を意識して読ませ、互いの読みを関連して伝え合うことを通じた学習が進むにしたがって、子どもたち自身が初発の読みを振り返り、自己の読みに対して深まりや新たな気づきを確認められるようにしながら学習を進めることによって総合的に読む力を高め、それを次単元の学習や読書時の初読力としていくものである。

②関連して伝え合うことによる自己変革

一昨年、昨年と「比較」を意識的に用いて認識力を高めることで、質の高い伝え合いを目指してきたが、今年度は、比較はもちろんのこと、子どもたち自身が、互いの発言について関連を探りながら聞き、考え、発言していくことで、学習がつながり、

発展し、より質の高い伝え合いを実現していけるのではないかと仮定した。毎時間、毎時間「関連して伝え合うこと」により、その時間の初めと終わりで自分の考えがどう変化したのかを意識させていく。それら1時間、1時間の自己変革をもとに全項①で述べた単元開始当初の自己の読みと、現時点での読みの違いを確認させていく。単元終末では、それらのひとつひとつの経験が、積み重なり総合的に読む力を高めることにつながっていくと考えていた。

上述の研究仮説を2年生の実践例「お手紙」(アーノルド・ローベル作、三木 卓 訳)に照らし合わせて検証してみる。

この物語は、がまくんとかえるくんの心あたたまるやりとりの中にユーモアと互いを思いやるやさしい気持ちが表現されている。子どもたちは、2年生なりに本文を読み通して「ユーモアとやさしさ」について感想を書き、自分の初発の考えを伝え合った。かたつむりくんががまくんへのお手紙を託したかえるくんが、自分の家ではなく、がまくんの家へ戻る場面をとらえてAくん、Bくんは次のように発言している。

A:「かえるくんは、がまくんの喜ぶ顔がみたいからがまくんの家にもどったと思う。だから、かえるくんはやさしいと思う。」

B:「かえるくんはがまくんが手紙をまつのをあきらめてしまわないようにするためにがまくんの家へもどった。かえるくんはなんてやさしい子なんだろう。」

Aくんが発言したとき、Bくんは、同じ場所で、同じようにやさしさを感じていることを伝えた。それを聞いていたCさんは、

C:「Bくんとにってるんやけど、段落のところに『きみおきてさあ。』ってあるから、わたしもがまくんが手紙をまつのをあきらめてしまわないようにがまくんの家へもどったんだと思います。」

と発言した。Cさんは、Bくんの発言を受けて、自分もBくんと同じ考えであることの理由を文中にある「きみおきてさあ。」という言葉を用いて伝えた。また、Dくんは、前場面で、がまくんが、発している言葉を指摘し、

D:「前のところでもがまくんはいやになっているのがわかるよ。」

と発言し、がまくんがお手紙をまつことに嫌気がさしていることが、かえるくんががまくんの家へもどる原因になっていることを指摘した。ここでは、BくんがAくんに関わって発言している。Bくんは、Aくんの理由もやさしさの根拠として受け止めながら、自分の考えを伝えていられると思われる。また、Cさん、Dくんも互いの意見が関連することを意識して発言している。Aくんは、BくんやCさん、Dくんが関連しながら伝えるのを自分の考えと照らし合わせながら聞き、自分の理由とは違う理由の根拠となる本文に目を向け、別の理由のやさしさを享受していく。Aくん、Bくん、Cさん、Dくんの発言を聞いていたEさん。Eさんは、質問に対し、明確な考えを持てずにいたが、Cさんと同じ考えを授業後のワークシートに追記した。授業後には、全員が本時の伝え合いを通して自分の考えが変化したかを振り返る。また、これらの伝え合いを経ながら、単元の中、終わりなど適切に初発の感想を読み直す機会を設け、1時間1時間の自己変革を意識し、総合的に読む力の向上につなげていく。

③私たちの姿勢 ～関連して伝え合う場を築いていくために～

関連して伝え合うことにより、子どもたちの自己変革を促していくためには、言うまでもなく私たち教師にも子どもたちの発言を関連づけながら聞く姿勢が求められる。伝え合う子どもたちの中に存在する聞き合う子どもたちのつぶやきやまなざしを常に捉え、関連したつぶやきやまなざしを全体に返していくことで、より質の高い伝え合いを生むことができると考え、「まなざしの共有」をより丁寧に行っていくことを心がけてきた。